

vol.42
世界と資本主義、
どちらが先に滅びるか？

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

戦争、政治、金融、ビジネス、研究、恋愛、結婚……それらは全て賭けである。そう割り切ることができるなら、勝ち負けなんて大した意味を持たない。「賭ける」と書いて、「まける」と読む人もいれば、「もうける」と捉える人もいる。占いを信じたり、神頼みしたり、怪しげな数式やセオリーに当てはめてみたりして、予想が当たれば、自分は正しかったと思えばいいし、外れたら、何かが間違っていたと考えを改めるだけだ。しかし、実際には勝った者が正しいわけでも、負けた者が間違っているわけでもない。

自由主義と呼ばれた陣営では貧富の格差が拡大し、金持ちがさらに金持ちになる現状に多くの市民がうんざりしている。私は何人かの富豪を個人的に知っているが、彼らの誰一人幸福そうに見えないのは、彼らも所詮資本の奴隷でしかなく、自由を謳歌したことも、自身の富を再分配したこともなかったからだろう。むしろ、最低賃金に甘んじながらも、定時に帰宅し、サブカル、特殊な趣味、教養の世界に生きるニートやオタクの方が幸せそうに見える。もしかすると、立身出世から離脱したライフスタイルの雛形は千四百年も前から唐代の詩人たちによって用意されていたのかもしれない。

一度はヨーロッパや日本で葬られかけたマルクスを再分配や環境保護の観点から評価し直したり、生産様式ではなく交換様式に注目して読み直す試みがなされている。資本主義の暴走の歯止めとしての民主主義も社会主義もすでに機能不全に陥っており、市民は自分たちを抑圧する独裁者を支持し、その悪政に自発的に服従している。

果たして、世界が減ぶのと、資本主義が終焉を迎えるのは、どちらが先か、それは不毛な議論でしかないが、世界の方が先に滅びても、資本主義は存続するだろう。人類が文明の主役の座から退場し、汎用型AI中心の機械文明だけになった後も、資本主義は普遍原理として残り、惰性で利潤追求を続けるのだとしたら、そんなくだらない資本の原理など超越した異世界に転生しなくなるというものだ。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授